

ヤナセ天然スギの今後の取扱いに関する検討委員会(第1回)議事概要

【概要】

- ・希少な天然林として保護するということだけではなく、銘木としての需要があるのであれば、木にとって一番良い時期に伐採し、利用することが大事ではないか。
- ・木は伐って活かしていくものであるが、ヤナセスギは特別な国民県民の財産であり、循環型の利用計画を立てて欲しい。
- ・ヤナセスギが無くなれば、20～30年後に再び大径材が出たところで、それを製材する人もいなくなってしまう。
- ・過去の調査結果によれば、ヤナセ天然スギの資源量の回復力はあると思われるが、後継樹も少ない状況にあり、これまで通りの伐採は難しいのではないか。
- ・ヤナセ天然スギは速いスピードで資源が枯渇しており、非循環的になっていることが分かる。活用しながら保存していくためには、きちんとした評価が必要。
- ・人工林スギに代替していくということだが、長伐期の人工林スギが伐期を迎えるのに何十年もかかる。それまでの間、ヤナセスギをどのように取り扱っていくのか。ヤナセスギを経済資源として活用していくのか、地域の観光資源として維持していくのか。
- ・天然杉から人工林のスギへの移行がうまくいくのか。通常取引であれば需要があって供給されるということになるが、欲しいけど無いという状況なのか。
- ・厳しい現状の価格になったのはなぜなのか。なぜ使われなくなったのか。
- ・樹高の分布の違いによって施業の方法が変わるのか。また、利用する側では、径級によって何か変わるのか。
- ・ヤナセ天然スギの伐採は、事業収支面も考慮して、高い収益までと言わないにしても、マイナスを出しながら行うことは難しい。